

〔翻 訳〕

親密性のレジーム：モノそのものについて（下）

ロラン・テヴノー
中原 隆幸，須田 文明 〔共訳〕

Laurent Thévenot, “Le régime de familiarité. Des choses en personne”, in *Genèses*, 17, Belin, 1994, pp.72-101

© Belin/Humensis, 1994.

（「親密性のレジーム：モノそのものについて（上）」『阪南論集』54（1），2018から続く）

Ⅳ エピローグ：自転車に乗った存在

ハイデッガーの靴からメルロー＝ポンティの帽子を経てサルトルの自転車に至る，モノの親密性は，現象学的伝統と密接な関係にあり，我々のアプローチとこれを対置させるために，こうした伝統において展開されている親密さについて想起することで，結論を導くことにしよう。

まずはじめに，サルトルへのその影響によってでしかないとしても，ベルグソンが『物質と記憶』において提案した，事物（身体そのものを取り囲み，この身体の「可能な活動を自らに反響させる」）の分析に言及しなければならない⁶⁹⁾。ヒト・エージェントはプランを執行するのではなく，彼や彼女を取り囲んでいる外在的なモノによって，可能な活動を産出させるがままにさせるのである。すなわち「あたかも，モノの潜在的活動行為を中断し，また再開するために，外在的なモノの現実的活動を選別させるように，すべてが進んでいくのである」（p.363）。身体は知覚と，駆動的性向との間の接合の場所である。「知覚された事物の接合を解きほぐす

こと」の習慣は，視覚的知覚が「事物の図を描かせる駆動的性向」によって補完されているからである（p.243）。「我々は，うまく統御された駆動的同伴の意識，組織された駆動的反応の意識が，ここでは親密性の感情の基礎である，と推測しなければならないのではなかろうか」（p.239）。

『存在と無』のサルトルにおいて，「見られる事物のシステム」⁷⁰⁾は，アクターの古典的姿を，しばしばそれをひっくり返すまでに修正することに貢献する。すなわち「吸い取り紙によってインクを吸い込むように，モノによって私を飲み込ませること」である（p.305）。どのようにして「世界が，いかにして，なされるべき行為の指示として明らかになるか」を説明するために，道具性 *ustensilitéé* の概念をハイデッガーから援用して，サルトルは「モノ＝道具」を設定し，これは，「どのように振る舞うのか，の客観的やり方」を指し示す。すなわち釘は「打たれるべきであり」，ハンマーは「柄によってつかまれるべきである」（p.370）。こうした「何でもよいように格付けされるのではないような生の所与」の「事実性 *facticité*」は，しかしながら，人間存在が選択を行い，彼・彼女の「自由なプロジェクト」が，美しい，もしくは登攀可能なものとしての岩山を発見するような，そのような「状況」において，人間存在に場を与えるのである。「周辺環境」はその逆境係数 *coefficients d'adversité* によって「私を取り囲むモノ＝道具」でしかない（サイクリングにおいて，パンクするタイヤ，灼けつくような太陽，正面から吹く風，これら

が周辺環境を構成している）(pp.561-562)。また道具的な、立ち向かってくるモノの状態は親密性を捉えるにけっして都合よくはなく、行動フォーマットに近すぎるプロジェクトはなおさらである。しかしながらサルトルは、「私が、私と共に、私の周辺環境のコレクションを存在へといかに引き込むか」についての、（ここで我々の関心を引く）領有に配慮している（p.651）。私の職場から、私の仕事から切り離されて、売り場ホールで「根本的に消灯している」ランプの「機能的存在」しか検討されない。所有される事物が、丸ごと、「私を表象する」とすれば、それは「魔術的關係において」である。

サルトルは購入から親密化を隔てている持続性の地平を認める。自転車が「私に帰属する」ために、銀行紙幣を差し出すだけで十分であるとしても、「こうした所有を実現するためには私のまるごとの生」を必要とする（p.654）。こうした持続性は「継続された」、しかし象徴的な「創造」である。すなわち領有は「具体的なこととは全く関係ない」。使用ではなく、摩耗によってこそ領有の具体性に取りかかることができる。我々の調査の観察と一致する摩耗についての微細な現象学において、サルトルが我々に垣間見せてくれるのは、「その運動そのものによって移動することで、私に提供されることで、自転車が創造され、私のものとなる」ことである。「しかしこうした創造は、軽微で継続的な摩耗（創造が事物にもたらす）によって、事物の中に深く刻印される。（中略）事物が私のものになるのは、私がそれを摩耗させたからである。私のものの摩耗はまた、私の生の裏面である」（p.655）。こうして新品への中古品の対立が提示されることになる。こうした対立は、Brummellの事例によっても説明される。これは、そのエレガントさをすこし摩耗した衣服にしか与えないのである。それは「ぎこちなくさせる」、「誰のものでもない、新品への憎悪」を表明する。摩耗において、サルトルの解釈は、真正性についての、また「無人称のon」の支配のハイデッガー的テーマにしたがうのではない。彼の解釈

は別の方向で、所有の「実存的心理分析」へと向かい、これはヘーゲル的な「主人＝奴隷」関係を援用し、欠如についてのフロイト的テーマ（所有＝破壊としての事物への関係を提起する）の一般化を提供する。こうして摩耗とは「奴隷の刻印のようである」。

使用と摩耗とのこうしたアプローチはハイデッガーにより取り組まれたアプローチとは隔絶している。しかしサルトルは、（無に近い空虚さとしてとじこめる持ち主による）存在の把握の困難への彼のアプローチの主要なタームをハイデッガーから援用しているのである⁷¹⁾。把握の開放はすでに主人の中にある。すなわち田舎を満喫している散歩者にとっての山並み、自らの日常の仕事を行っている農民にとっての山並み、気象学的報告書をまとめている気象学者にとっての山並み、である。また教会を訪れる、芸術史家にとってのロマン式教会正面玄関、僧侶たちと、玄関に入ってくる神父にとっての教会正面玄関、夏のある日、その日陰で遊びに興じる子供たちにとっての教会正面玄関である（p.46）。使用は、サルトルにより採用された道具性とも隔絶し、手元にあるハンマーの道具性⁷²⁾、「計算された事物」に与えられた摩耗とも、代理のために製造された純粋な使用事物とも隔絶している⁷³⁾。「利用 utilisation は使用 usage の折衷的形態でしかない」。逆に後者は「適応する反応」を関与させる⁷⁴⁾。プロジェクト＝投企による出口、逆に、固有なるものとしての親密性のテーマはハイデッガーの著作の中で発展させられた。ヘルダーリンとの「対話」において⁷⁵⁾、「我が物とすること」Innigkeitは親密性、家、住居、近所、国において展開する。「自分のものとして持っているものの自由な使用」の探求であり、この詩人のことばによれば（p.243）、「それ自身のものがまた各人にも与えられ…。可能となるまで、各人がそこに行きつ戻りつする」。

原注

- 1) 社会構築主義と科学社会学（以下を参照。D. Bloor,

- Wittgenstein. *A Social Theory of Knowledge*, New York, Colombia University Press, 1993) の精緻化のために、その著作から着想を得ることになる様々な論者とは異なって、デュルケームは社会性と客観性との区別を維持している。以下を参照。E. Durkheim, *Les formes élémentaires de la vie religieuse*, Paris, PUF, 1960, H. Jonas, "Durkheim et le pragmatism. La psychologie de la conscience et la constitution sociale des catégories", *Revue française de sociologie*, vol.25., 1984, pp.560-581.
- 2) 以下を参照。L. Thévenot, "Objets en sociétés: suivre les choses dans tous leurs états" Alliage., "Quelles politique avec les choses?", *L'Action politique aujourd'hui*, Paris, Editions de l'Association freudienne internationale, 1994, pp.113-127.
 - 3) 以下を参照。L. Thévenot, "L'action qui convient" in P. Pharo et L. Quéré, (eds). *Les Formes de l'action, Raison pratique*, no.1, Editions de l'EHESS, 1990, pp.39-69.
 - 4) M. Augé, *Le Dieu objet*, Paris, Flammarion, 1988., pp.20, 112.
 - 5) M. Augé, *ibid.*, p.94.
 - 6) フランス社会科学高等研究院EHESSでの彼らのセミナー「政治の論理」の中でJ. BazinとA. Bensaにより展開された「モノの力」の分析方針は、まさに、事物＝記号の状態へと、モノを縮減しないことを目的としている。本号では、Marika Moisseeffeが、(その物質性への根付きを維持する) 文化的事物の表象的機能の境界(荒削りの技法の、あまり図像化されていない、ヘテロな要素)の中に、儀礼におけるその力の源泉を見ている。行動における事物を挿入する研究の概略については、このテーマに関する2年間のセミナーの成果として、以下を参照。B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot (eds) *Les objets dans l'action, Raison pratique*, no.4, Paris, Editions de l'EHESS, 1993.
 - 7) 親密性の関係は経済学者にはなじみがなく、このことが、「個人」がパーソナルなこととけっして混合されないことをはっきりと浮き彫りにさせている。より一般的に「ルーティン」概念によって熟慮せざる行動を検討するために、技術変化の新しい経済学とともに、行動フォーマット及び、(経済文献の中で、このフォーマットが縮減されている) 合理的選択モデルと、全く異なった行動へのアプローチが登場しているのが見られる。
 - 8) 以下を参照。G. H. Mead, "The physical things", in *The philosophy of the Present*, Chicago, Chicago University Press, 1980.
 - 9) 以下を参照。M. Mauss, *Manuel d'ethnographie*, Paris, Payot, 1989.
 - 10) M. Mauss, "Divisions et proportions des divisions de la sociologie", *Année sociologique*, 2., 1927., rééd. dans *Essais de sociologie*, Paris, E. de Minuit, 1971, p.45.
 - 11) M. Mauss, "Les techniques du corps", *Journal de psychologie*, 32, no.3-4, 1934, rééd. dans *Sociologie et anthropologie*, Paris, PUF, 1950, pp.365-386.
 - 12) A. Leroit-Gourham, *L'Homme et la Matière*, Paris, Albin Michel, 1943, rééd. 1971.
 - 13) A. G. Haudricourt, *La technologie, une science humaine*, Paris, Ed. De la Maison des Sciences de l'Homme, 1987, p.174.
 - 14) Y. Deforge, *Technologie et génétique de l'objet industriel*, Paris, Maloine, 1985.
 - 15) M. Mauss, *ibid.*, 1950, p.383.
 - 16) Paris, Droz, 1972.
 - 17) M. Mauss, *ibid.*, 1950, p.369.
 - 18) M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945, p.160, p.171. ハビトゥス概念についての意味論的空間については以下を参照。F. Héran, "La seconde nature de l'habitus. Tradition philosophique et sens commun dans le langage sociologique", *Revue française de sociologie*, 28, 1987, pp.385-416.
 - 19) M. Merleau-Ponty, *L'œil et l'esprit*, Paris, Gallimard, 1946, pp.9-12.
 - 20) M. Merleau-Ponty, *Le Visible et l'Invisible*, Paris, Gallimard, 1964, p.245.
 - 21) M. Merleau-Ponty, *ibid.* 1945, p.171. C. BessyとF. Chateauraynaud ("Les resorts de l'expertise", in B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot, *op. cit.*, 1993, pp.141-164) は、表象なしでの活動についての人工知能のいくつかの研究へと、(Merleau-Pontyによる表象と象徴的機能についての) 批判を、正當にも強く関連づける。彼らはこうした批判の方向で、「世界への手がかりのシステム」として、「把握」と身体という彼らのテーマを発展させる。以下を参照。R. A. Brooks, "Intelligence without representation", *Artificial Intelligence*, vol.47, no.1-3, 1991, pp.139-159. 心理学者については以下を参照。D. Kirsh, "Foundations of Artificial Intelligence: the big issues", "Today the earving, tomorrow man?", *Artificial Intelligence*, vol.47, 1991, pp.3-30, pp.161-184. 行動におけるプランと表象についての位置づけについての微妙な議論については以下を参照。B. Conein et E. Jacopin, in B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot, *op.cit.*, 1993. 「状況におかれた行動」と「状況におかれた認知」の様々なアプローチの比較については以

- 下を参照。B. Conein et E. Jacopin, "De l'action a la cognition située: le savoir en place", 1994, *Sociologie du travail* (Travail et cognition).
- 22) A. Leroi-Gourhan, *Le geste et la parole, Technique et langage*, Paris, Albin Michel, 1964, p.210, p.91.
- 23) A. Leroi-Gourhan, *ibid.*, 1964, p.93.
- 24) 以下を参照。C. Lafaye et L. Thévenot, "Une justification écologique? Conflits dans l'aménagement de la nature", *Revue française de sociologie*, vol.34, no.4, 1993, pp.495-524.
- 25) 「コーディネーション」とは、広義で使用されており、必ずしも第三者のコーディネーターもしくはルール、行動プランといった一般的な準拠さえも前提していない。
- 26) 以下を参照。L. Boltanski et L. Thévenot, *De la justification*, Paris, Ed. Métailié, 1991.
- 27) 日常言語は行動フォーマットの中で関連づけ、検討するのに適切であるからと言って、この言語が、特定条件において、別の扱いの中で役立つことができないわけではない。正当化のレジームにおいて、この言語の使用は、コンヴァンション的な格付けを持つ実体によって、行動の主体と事物を代替させることを必要とする。日常言語はまた、超自然的なエージェンシーの召還も支えることができる。しかしながら、Elisabeth Claverieが、幽霊apparitionsについてのその研究の中で示しているように、「奇跡話」や「恩寵話」は特別な相互学習を必要とする。以下を参照。E. Claverie, "Voire apparaître, Les événements de Medjugorje", J.-L. Petit (ed), *L'événement en perspective, Raison pratique*, no.2, Paris, Editions de l'EHESS, 1991, pp.157-176. 言語ゲームの適用を超えて、この語りは、(言葉での説明から、その引き離し能力と輸送の能力を奪う) 躍動した身体のコミットメントを要求する(行動を語る際の最初の長所の一つ)。
- 28) 以下を参照。P. Ricœur, "Le discours de l'action", dans D. Tiffeneau (ed) *La sémantique de l'action*, Pairs, Ed. du C'RS, 1987.
- 29) 以下を参照。L. Thévenot, *op.cit.*, 1990, p.49, p.52, p.54.
- 30) 事物について特集を組んだ *Sociologie de l'art* の近年の号の論文の中で、Nathalie Heinichはいかにして「事物が人でありえるか」について検討し、人として行為するフェティシズム的事物と、人に帰属した遺物としての事物、人として扱われる芸術的事物とを区別する。"Les objets-personnes: fétiches, reliques et œuvres d'art", *Sociologie de l'Art*, no.23, 1993, p.27. 遺物としての事物は、固有名へのその結合により特徴付けられ、芸術的事物は(これを同定する)戸籍によって特徴付けられ、モノと人との接近の原則的説明は、共通の分割不可能性、「代替不可能な」性格に存する。さらに、本号の Marika Moisseeff の論文と、以下の Augé の引用が示しているように、フェティッシュに付与されるエージェンシーが、存在と介入のその様式であるのか、行動フォーマットにおいて、アクターのそれと混同されるかは、たしかではない。
- 31) こうした扱いと、行動フォーマット及び使用に照らしてのその限界について以下を参照。L. Thévenot, "Essai sur les objets usuels: propriétés, fonctions, usages", in B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot (eds) *op.cit.*, 1993.
- 32) Micahel Polanyiは、事物の機能的アプローチ(評価可能であり、事物をその正確さのルールにおいて記述することができる)と、物理学的扱い(将来の状況を予測することをもたらしとしても、この機能については我々には何も語らない)との区別を強調する(M. Polanyi, *Personal Knowledge*, London, Routledge and Kegan Paul, 1962, pp.329-330)。
- 33) Emmanuel Kessousとともに、我々に行うことを可能とさせてくれた調査について、ここで、エンジニアの方々に感謝を述べたい。以下を参照。E. Kessous, *Le rôle de la norme de sécurité dans la coordination des actions. Etude sur un produit de puériculture*, mémoire de DEA de l'Economie des institutions, Paris X-EHESS-Ecole Polytechnique, 1992, (sous la direction de L. Thévenot)。
- 34) 実験者は、そのコントロール室の中に、目立つように赤い大きなスイッチを備えている。これによって、(子供がそのおもちゃの電車のレールを電気配線に直接つなごうとしたときのように)電気設備と関連した緊急な危険の場合に、実験者は、部屋全体の電流供給を切断することができる。
- 35) 以下を参照。F. Mouliérac, "Litiges autour de la qualité des produits: les services après-vente", Paris, GSPM と *Désaccord sur la défaillance d'objets techniques. Interactions au Service Après-Vente entre utilisateurs et réparateurs*, mémoire de DEA de sociologie, Paris, EHESS, 1992, (dir. L. Thévenot)。
- 36) 「追加的なレシピなしに卵を料理できる」という、プレート電熱器の使用書きを文字通り受け取って、ある利用者が、この器財の上に卵を置くことで、この料理を行おうとしたが無駄であった。そこに水を注ぐことなど思いつかなかった。使用書という「行うための言葉」については以下を参照。D. Boulter et M. Legrand (eds) *Les mots pour le faire*, Paris, Ed. Descartes, 1992.

- 37) コンピュータとの関係についての文献において、インターフェースが透明な契機と、操作が、目的に直接関連している契機、インターフェースが微妙な契機（とりわけ、これが反省性を要求するメッセージを送るから）がはっきりと区別される。以下を参照。E. L. Hutchins, J. D. Hollan et D. A. Norman, "Direct Manipulation Interface", in D. A. Norman et S. W. Draper (eds) *User centered System Design, New Perspective on Human-Computer Interaction*, Hillsdale, NJ. London, Lawrence Erlbau, 1986.
- 目盛りの針によって、行為が測定機器というインターフェースを対象としているのであって、この機器が示している空間ではないような、そのような契機については、Hutchinsのわかりやすい説明について、さらに以下も参照。E. L. Hutchins et L. Palmer, "Constructing meaning from space, gesture, and talk", contribution au colloque de OTAN "Discourse, tools, and reasoning: situated cognition and technologically supported environments", Lucca, Italie, 2-7, novembre, 1993.
- 38) このCreeping featurismの批判については以下を参照。D. A. Norman, *The Design of everyday things*, New-York, Doubleday, 1989, pp.172-174.
- 39) こうした観察は、F. Mouliéracにより行われた調査の結果である（上述）。
- 40) 人間の間での関係へと、こうしたモノとの調節を移転するという、逆転運動において、通常、社会的統合の政策に関与する教師のジャージンの中で、人の進化を示す状態の顕著な変化を指し示すために、「転機＝カチリという音 *déclat*」について語られる。
- 41) 以下を参照。W. Buxton, "There's More to Interaction Than Meets the Eye: Some Issues in Manual Input", in D. A. Norman et S. W. Draper (eds) *User centered System Design. New perspective on Human-Computer Interaction*, Hillsdale, NJ, London, Lawrence Erlbaum, 1986, pp.319-337.
- 42) Magaudと杉田とともに、Angers—長野調査の最終段階での観察。L. Thévenot, "Nouvelle approches du travail", *Lettre du Centre d'Etudes de l'emploi*, no.25, 1992.
- 43) 以下を参照。D. A. Norman, *Turn Signals Are the Facial Expressions of Automobiles*, Readings, MA: Addison-Wesley, 1992.
- 44) 逆に、Norbert Eliasは、その人間存在とその感情についてのエッセーの中で、「財務諸表となることで、相貌が進化する」と主張する。"On Human Beings and Their Emotions: A Process-Sociological Essay" *Theory, Culture & Society*, vol.4, 1987, pp.339-361, とりわけ p.357.
- 45) したがって、こうした「社会的」感情は、評価されるということの展望と結合している。判断における認知と感情との間の錯綜については以下を参照。P. Livet et L. Thévenot, "Modes d'action collective et construction éthique: les émotions dans l'évaluation", contribution au colloque "Limites de la rationalité et constitution du collectif", Cerisy, 6-12, juin, 1993.
- 46) この問題については以下を参照。B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot, *Les Objets dans l'action*, op.cit., 1993. B. Conein et E. Jacopin, op.cit., 1994.
- 47) この観察は、F. Mouliéracと共同でなされた。
- 48) B. Latour, *Aramis ou l'amour des techniques*, Paris, La Découverte, 1992.
- 49) R. Linhardt, *L'Etablis*, Paris, Ed. De Minuit, 1978, pp.155-174.
- 50) A. Mallard, *L'instrumentation scientifique entre science et technique. Recherche sur la morphologie et la dynamique de l'expérimentation*, mémoire de DEA de sociologie de l'EHESS, (dir. B. Latour), 1991, p.70.
- 51) 使用者によって、発見され、体験された品質の検討における、また移転不可能な「コツ」を必要とする、故障と修理の検討における、使用 usage の分析について（「原因の一覧表」の作成とは逆に）、以下を参照。M. Akrich, *Inscription et coordination socio-techniques: anthropologie de quelques dispositifs energetiques*, these sous la direction de Michel Callon, Ecole des Mines, 1993, pp.169-172, 199-220. 構想者の装備から使用者までのフォローについては以下を参照。"Les objets techniques et leurs utilisateurs: de la conception à l'action", in B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot, (eds) *Les objets dans l'action*, op.cit., 1993, pp.35-57.
- 52) だからこそ、目印の承認において、またその相互作用において専門知は、専門家のシステムの中で体系的にとらえがたいのであり、とりわけ、証明において型にはめにくいのである。「この熟練した人類学者は直ちに、頭蓋骨の地理的な出自を認識し、次いで、何週間も、その数値的な証明を施すことについてやした。こうした証明は、彼が、その自発的な同定を無意識的に基礎づけていた特徴の多くを取り逃がすのである」。(A. Leroi-Gourhan, op.cit., 1964, p.89)
- 53) B. Conein et E. Jacopin, op. cit., 1994.
- 54) しかしながら、とりわけ私的な空間での整理は、まれにしか純粹に分類的ではない。つまり、整理は、使用とその親密な結合を考慮し、このことは、親密ではない人にとってこの整理へのアクセスを

- 不完全にさせる。
- 55) 行動の扱いの差別化における、こうした時間的展望の重要性については以下を参照。N. Dodier, "Agir dans plusieurs mondes", *Critique*, "Sciences humaines, sens social", no.529-530, 1991.
 - 56) D. A. Norman, "Les artefacts cognitifs", in B. Conein, N. Dodier, L. Thévenot, (eds) *op.cit.*, pp.15-34.
 - 57) L. Boltanski は, *L'amour et la justice comme compétences*, Paris, Ed. Métailié, 1990 のなかで「事物の平和」について語っている。
 - 58) C. Heath, P. Luff, "Collaboration and Control: Crisis Management and Multimedia Technology in London Underground Line Control Rooms", *Computer Supported Cooperative Work*, 1, 1992, pp.69-94.
 - 59) P. Livet, L. Thévenot, "L'action collective", in A. Orléan (ed). *Analyse économique des conventions*, Paris, PUF, 1994, pp.139-167.
 - 60) C. Heath, M. Jirotko, P. Luff, P. J. Hindmarsh, "Unpacking Collaboration: the Interactional Organisation of Trading in a City Dialing Rooms", in G. De Michelis, C. Somone, K. Schmidt (eds), *Proceedings of the Third European Conference on Computer Supported Cooperative Work*, Holland, Kluwer, 1993, pp.155-170.
 - 61) L. Thévenot, "Jugements ordinaires et jugement de droit", *Annales ESC*, no.5, 1992, L. Thévenot, "Formes de savoir collectif et régimes d'ajustement des actions: coördination par jugement commun/accommodation et connaissance distribuées", communication au colloque "Limites de la rationalité et constitution du collectif", Cerisy, 6-12, juin, 1993.
 - 62) 実験室の予算と時間に占める器具の清掃作業の膨大な位置を見よ。同様に、製造現場において、完全な事物の平穏な表面が、「不十分な塗装の縞模様や塗り方が、作業員の無能さを告発する」(R. Linhart, *op.cit.*, 1978, p.57)。その結果、労働者が「わめき始め、自動車のフェンダーに突進し、ドライバーをナイフのように振り回し、10台ほどの車に傷をつけて回るときのように」(*ibid.*, p.59)、反乱は、直接、事物に向かう。我々は、作業台での存在物の劇的な不都合について思い出す。新しい、正常で、機能的な作業台の到着が親密性のレジームを切断し、そのコツにおいてのみならず、そのパーソナリティにおいて、修理工を打ちのめすのである。「居心地の悪い振る舞い」にとらわれて、この修理工は、「混乱し」、「赤くなって、呆然としている」。ところが上司は工業的な格付けの試験の条件を浴びせかける。「私はあなたを15分前から観察しているけれど、あなたは、何をやっているのだ。どんな優秀な機械も、これを使用する人がその機能を理解し、これを正確に使用しようとする努力をしないならば何の役にも立たない。私たちはあなたに近代的な、慎重に開発された設備を導入しているのに、これがあなたのしていることだなんて」(*ibid.*, p.173)。
 - 63) その正常な使用を迂回する、コンピュータのハッカー名手のゲームを見よ (N. Auray, *Les démelés avec l'ordinateur*, *Sociologie de la convivialité informatique*, mémoire du DEA de Sociologie de l'EHESS, dir. L. Thévenot, 1992)。人とモノとの共同的なコミットメントの成功の広範な部分が使用者の身体の巧みなコツに依存するとき、扱いにおける器用さの重要性が、「行為」そのものの操作の同定を促す。Goffman は、「ルーレットやスキー、サーフィン、乗馬術といった、『扱うのに』困難な身体的延長を通じて、自らの身体の管理された運営の感覚を見いだす必要」を指摘する (E. Goffman, *Les cadres de l'expérience*, Paris, Ed. De Minuit, 1991, p.42)。こうした「柔軟な誘導」について、より一般的に、手作業的偉業におけるこうしたコツの使用については、以下の見事な分析を参照。N. Dodier (*op.cit.*, 1993)
 - 64) G. Simmel, *Philosophie de l'argent*, Paris, PUF, 1987.
 - 65) M. Mauss, *op.cit.*, 1950, pp.232-233, I. Thomas, "Res, chose et patrimoine; note sur le rapport sujet-objet en droit romain" *Archives de philosophie du droit*, 1980.
 - 66) L. Boltanski, L. Thévenot, *op.cit.*, 1991.
 - 67) 正当化の秩序を示すために用いられる「家内的」というタームは、もしそれが私的領域、世帯もしくは家庭への閉鎖を示唆するならば、混乱の元となり得る。本稿で展開された分析は、こうした混乱を予防するに違いない。
 - 68) P. Livet, L. Thévenot, *op.cit.*, 1974.
 - 69) H. Bergson, "Matière et Mémoire. Essais sur la relation du corps à l'esprit", in *Oeuvre*, Paris, PUF, 1971, p.172.
 - 70) J.-P. Sartre, *L'Être et le Néant*, Paris, Gallimard, 1984, p.364.
 - 71) M. Heidegger, *Introduction à la métaphysique*, Paris, Gallimard, 1967.
 - 72) M. Heidegger, *L'Être et le Temps*, Paris, Gallimard, 1964.
 - 73) M. Heidegger, *Chemins qui ne mènent nulle part*, Paris, Gallimard, 1962.
 - 74) M. Heidegger, *Qu'appelle-t-on penser?* Paris, PUF, 1959, p.177.

Oct. 2019

親密性のレジーム

- 75) M. Heidegger, *Approche de Holderlin*, Paris, Gallimard, 1973.

（2019年7月12日掲載決定）